

イブン・エル・アチルは大石死歿の年を一一四三年とせること上述の如し。アライウドヂンは大石がトランスオキジアナを征し、其の將エルヌズをしてホラズムを征せしめ、之と和約したる後幾何もなくして死せりと記せども、明らかに其の年次を知るを得ず。たゞ此の時に近かりしを推察し得るに止れり。今漢史の記する所につきて之を考ふるに、金史粘割韓奴傳によれば、「皇統四年(一一四四)回紇遣使入貢、言大石與其國相隣、大石既死、詔遣韓奴、與其使俱往、因觀其國風俗」と記せり。されば其死は此の年以前のことなると共に、また一一四一年の戰以後に屬すべきこと勿論なれば、イブン・エル・アチルの一一四三年と記せるは、思ふに正鵠を得たるものなり。而して大石の死を此の年に置くことの正しかるべきことは、西遼滅亡の年より大石以後の西遼四代の君主の在位年數を減ずることによりても之を證し得べし。西遼滅亡の年は甲辰の年より八十八年を経たる宋の寧宗嘉定四年(一一二二)なるべきこと既に錢大昕の考證を経たり(養新餘錄卷八)。而して大石以後の四代の君主の在位は合せて六十八年なれば、一一二一年より之を減ずればまさに一一四三年となり、以て東西の記録の大石の死時に關して一致するものなるを知り得べし。

此の如くにして彼の死時を定め得たれば、これより十二年を逆算せし年、即ち一一三二年、金の天會十年なる年は實に大石が葛兒罕の位に上りたる年にして、また西遼開國の年ならざる可らず。こゝに於てかサマルカンドを征したる後、起兒漫に於て大石が初めて位に即きたりとせる遼史本文の記事は全く事實を誤れるものにして、事は既にこれより九年の以前に屬せしを認めざる可らず。思ふにアライウドヂンが、大石がイレクカン家に代りてベラサグンに入り、王位に上れりと記せるものは、即ち大石がグルカンの位に上り、西遼(即ちカラキタイ)の國を肇むるに至り